創刊の辞

中村唯史

「東方キリスト教世界」とは，歴史的に東方キリスト教が定着してきた地域を指す。東はロシアから，アルメニア・グルジア等のコーカサス地方を経て，西はギリシア，セルビア等のバルカン半島まで，さらにコプト，シリア，エチオピアの諸正教会が影響力を有しているアラブ地域や北アフリカをも包摂する。本誌は，これら東方キリスト教圏と多様な接触を重ねて来た地域も視野に入れているので，事実上はユーラシア大陸のほぼ全域とアフリカ北部を対象とすることになる。

「東方キリスト教世界」という用語は，あるいは誤解を招くかもしれない。本誌は神学の研究誌ではない。宗教学やキリスト教学はもちろんだが，歴史学，地理学，文献学，文学，思想史，地域研究等々，さまざまなディシプリンに基づく論考を掲載する場だ。

この用語を敢えて誌名に掲げるのは，長い歴史的な視野に立って見るなら，東方キリスト教がただ宗教としてだけではなく，国家理念や社会規範，倫理や価値基準として，すなわち広義の世界観として機能してきたことを考慮したいからだ。本誌が，多様な学問領域が自律性を保ちつつ交差するコラボレーションの場となるべき理由も，ここにある。

もっとも，過去において宗教が広義の世界観だったことは，仏教でもイスラム教でも，あるいはカトリックでも同様だ。それでも敢えてこの用語を掲げるのは，とりわけ日本において知識と理解が欠落しているこの広大な地域の一体性と多様性を論じていくことの重要性に鑑みてのことである。

わが国の異文化研究における米国・西欧と中国に関する学問的蓄積の突出は，日本がたどってきた歴史的な経緯を思えば，確固とした理由のあることだ。だがその結果としてユーラシアからアフリカに及ぶ広大な地域に関する知が今後も希薄であり続けるとすれば，それはグローバリゼーションが進行し，諸地域相互が直接に結びつきつつあるなかで，明らかに望ましいことではない。本誌が日本における知の均衡化の一翼を担うことを願う。

（なかむら　ただし　京都大学大学院文学研究科教授）